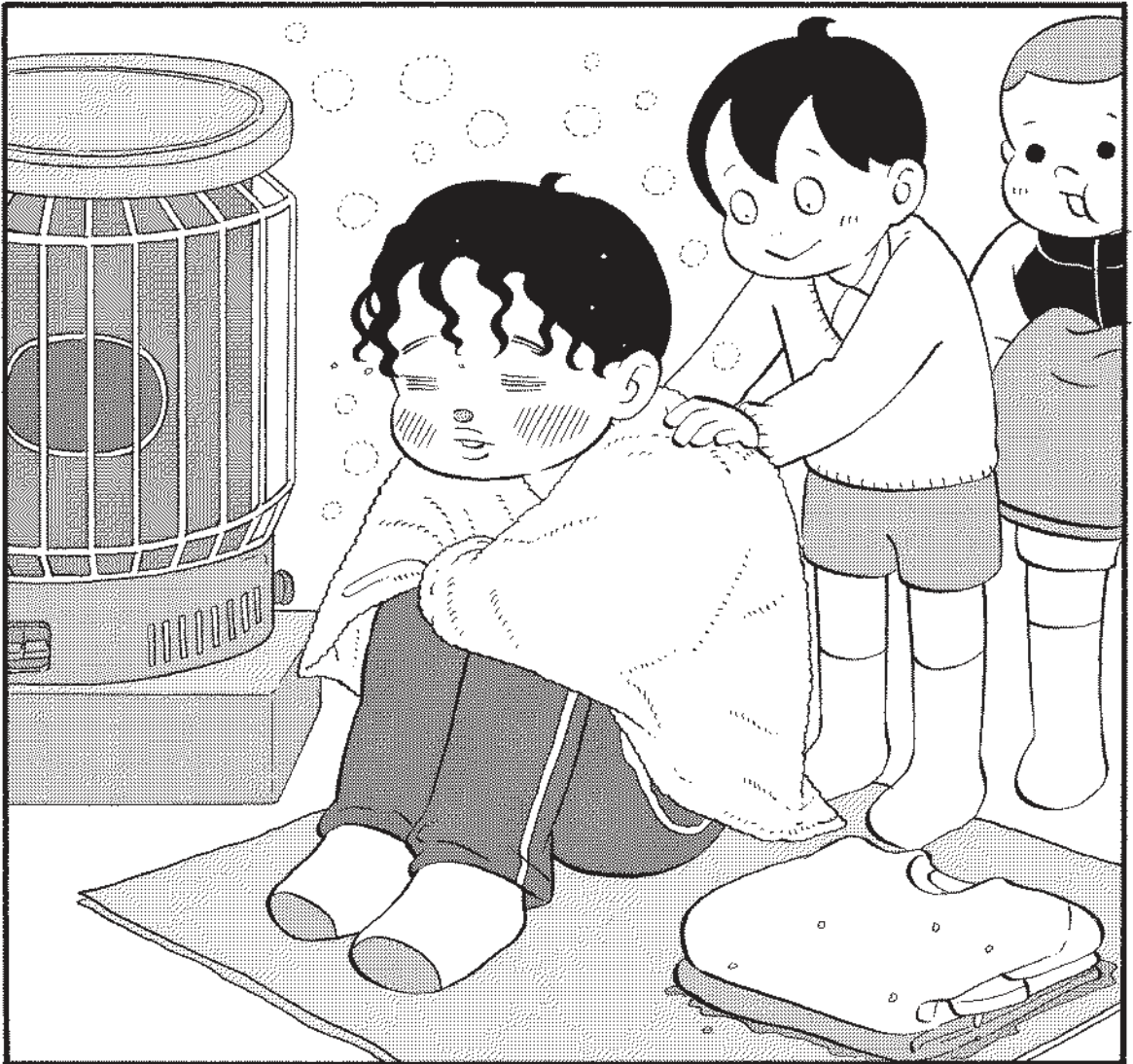




【地震後、津波が起こったら】

ぬ ひと たす
濡れた人を助ける

- ▶ ぬれた服を脱がせる
- ▶ かわいたタオルなどで体からだを拭く
- ▶ 毛布もうふ、カーテン、バスタオルなどを体からだに巻いて、温あためる



濡れた人を助ける

■ 状況シートの説明



▶ 場面ごとの説明

- ① 避難所には近所の人たちが集まって来ていますが、暖房がなくとても寒いです。「寒いなあ」とだいちくん。みなとくんは、「みんなだいじょうぶかな」と心配です。
- ② その時、みなとくんは、ずぶ濡れでブルブル震えている人が避難所に入ってくるのを見ました。「あっ、あの人ずぶ濡れだ!」。
- ③ 水びたしの服で、凍えている人が来たことを知ったみなとくんは、「○○○○」

▶ セリフの例 (行動)

- 「ずぶ濡れで震えている人がいます」
 「誰かタオルを持っていませんか」
 「毛布やコートはありませんか」

▶ 発問例

- ・ ずぶ濡れの人に対して、まずすることは何ですか？
- ・ 濡れた服をどのようにして乾かしますか？
- ・ タオルなどが無い時は、どうしたらいいですか？
- ・ こんな状況に対応するため、避難所に何を準備しておくといいですか？

■ 教訓シートの説明



▶ 濡れた服を脱がせる

- ・ 津波に巻き込まれたり、津波で水浸しになった道を歩いたため、ずぶ濡れになって避難して来る人がいます。
- ・ まず、濡れた服を脱いでもらいましょう。水に濡れた服は、体温をどんどん奪っていきます。

▶ 乾いたタオルなどで体を拭く

- ・ 乾いたタオルがあれば、濡れた体を拭きましょう。
- ・ タオルが無い時は、カーテン、ティッシュなど手に入る物を活用しましょう。

▶ 毛布、カーテン、バスタオルなどを体に巻いて、温める

- ・ 体温が下がっていくと、命を失う危険があります。
- ・ 避難所にストーブなど、乾かしたり温めたりできる物を準備しておくことが大切です。
- ・ 暖房や着替えが無い時は、毛布、カーテン、バスタオル、新聞紙、大きなビニール袋などを体に巻いて体を温めましょう。

■ 東日本大震災の教訓

東日本大震災が起こった日は雪が降り、とても寒くなりました。津波に巻き込まれてずぶ濡れになった人がいましたが、タオルも着替えもない避難所では、自分の服を1枚脱いで着せてあげた人や、体を温めるために一晩中体をさすってあげた人がいました。



【地震後、津波が起こったら】

どろ みず ちゆう い
泥や水たまりに注意する

- ▶ 泥や水たまりは、棒で深さを調べてから歩く
- ▶ ポリ袋で足が汚れないようにする



泥や水たまりに注意する

■ 状況シートの説明



▶ 場面ごとの説明

- ① 小学校に避難していたみなとくんは、買い物を頼まれ、近くのスーパーへ行きました。町では、津波が引いた後もあちこちに水たまりができていました。帰り道に、友だちのしんたろうくんに会いました。「何してるの?」。しんたろうくんは、長い棒を水たまりに突っ込んでいます。「ここが歩けるかどうか、調べてるんだ」と言いました。
- ② みなとくんは、しんたろうくんのすぐそばに、ある物を発見しました。「あっ、マンホールのフタが落ちてる」。「そう、だからこうして棒で調べるんだ」としんたろうくんは言って、泥や水で隠れた深い場所を棒で確かめる方法を教えてくれました。
- ③ こうして深みにはまらないように注意しながら、みなとくんとしんたろうくんは歩きました。「やっと着いたね」としんたろうくん。無事避難所に帰って来たところ、みなとくんは足元を見てびっくりしてしまいました。「あっ!」「〇〇〇〇〇」

▶ セリフの例 (気持ち)

「わっ、くつがどろどろだ」「ああ、足が気持ち悪い」
「くつが汚れちゃった」

▶ 発問例

- ・津波の後、道はどうなりますか?
- ・外を歩く時、何に気をつけないといけないですか?
- ・外を歩く時に便利なものは何ですか?
- ・身近なものを使ってくつの汚れを防ぐ方法はありますか?

■ 教訓シートの説明



▶ 泥や水たまりは、棒で深さを調べてから歩く

- ・津波が引いた後も、低い土地には水たまりができたり、沼のようなドロドロの状態になります。
- ・マンホールのフタが水に流され、深い穴に泥がたまり、どこに穴があるかわからなくなってしまいます。
- ・泥や水が残っている場所では、棒で深さを調べながら歩きましょう。

▶ ポリ袋で足が汚れないようにする

- ・ポリ袋はとても便利で、いろいろな用途に使えます。
- ・ポリ袋をくつ下の上から足にかぶせて、ひざのあたりをテープでとめ、その上からくつをはきます。こうすると、くつ下や足が汚れません。

■ 東日本大震災の教訓

津波の後、周囲は「まわりが沼のような状態」「道路から自宅の中まで10センチから20センチのヘッド口」になったそうです。そのため、「棒を持って出かけた」という人が多くいました。棒は水たまりを飛び越えたり、棒に荷物を結び付けて天秤のようにして荷物を運ぶことにも使えました。また、地震や津波の後には、いろいろな物が道に落ちています。釘やガラスの破片を踏んでしまい、足をけがした人がいます。気をつけて歩きましょう。